

Citation: Thinkhamrop J, Hofmeyr GJ, Adetoro O, Lumbiganon P. Prophylactic antibiotic administration during second and third trimester in pregnancy for preventing infectious morbidity and mortality. Cochrane Database of Systematic Reviews 2002, Issue 4. Art. No.: CD002250. DOI: 10.1002/14651858.CD002250.

CRG名: Cochrane Pregnancy and Childbirth Group

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 30 August 2009

Clib issue No.; N/U: 2010 issue 10, Update

背景: 一部の先行研究は、妊娠中の抗菌薬予防的投与は母体や周産期のアウトカムを改善することを示唆し、一部の研究は利益がないことを示し、また一部の研究は有害作用を報告した。

目的: 妊娠中期および後期における抗菌薬予防的投与が母体や周産期のアウトカムに与える効果を検討する。

検索戦略: Cochrane Pregnancy and Childbirth Group's Trials Register(2009年6月)と論文の参考文献リストを検索した。この検索を2010年9月2日に更新し、結果を本レビューの分類待ち(Awaiting classification)区分に加えた。

選択基準: 分娩前の妊娠中期や後期の女性を対象に、抗菌薬予防的投与とプラセボまたは無治療を比較しているランダム化比較試験(RCT)。

データ収集と分析: 試験の質を評価し、データを抽出した。

主な結果: 本レビューに9件のランダム化比較試験を選択した。8件の試験は、抗菌薬予防的投与の妊娠アウトカムに対する効果を検出する目的で、2508例の女性をリクルートした。別の1件の試験は715例の女性をリクルートしたが、重要なアウトカムについて報告しなかった。抗菌薬予防的投与は前期破水のリスクを低下させた(リスク比(RR)0.34; 95%信頼区間(CI)0.15~0.78(1件の試験、229例の女性))。早産歴があり、今回の妊娠中に細菌性膣炎(BV)を生じた妊婦において早産リスクの低下があったが(RR 0.64; 95%CI 0.47~0.88、1件の試験、258例の女性)、妊娠中にBVがなかった早産歴のある妊婦ではリスク低下はなかった(RR 1.08; 95%CI 0.66~1.77; 2件の試験、500例の女性)。すべてのリスク妊娠女性(早産歴あり/なし、今回の妊娠中の細菌性膣炎(BV)あり/なし)の間で産後子宮内膜炎のリスク低下があった(RR 0.55; 95%CI 0.33~0.92; 1件の試験、196例の女性)。抗菌薬投与経路に関しては、妊娠中の抗菌薬膣内予防的投与は感染性妊娠アウトカムを予防しなかった。

レビューアの結論: 妊娠中期や後期の抗菌薬予防的投与は、妊婦にルーチンに投与される場合、前期破水や産後子宮内膜症のリスクを低下させる。しかし、フォローアップの不能率が高く、我々の解析のそれぞれに対する研究数が少なかったため、本レビューの結果にはかなりのバイアスがある可能性もある。従って、妊娠アウトカムに対する感染性有害作用を予防するため、妊娠中に抗菌薬をルーチンに使用するよう推奨するに十分なエビデンスはないと結論する。

(監訳 江藤宏美)

翻訳公開日: 2011年7月12日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。